
ガラス製の彼女

みすず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガラス製の彼女

【Nコード】

N1041T

【作者名】

みすず

【あらすじ】

俺が笑っても、彼女は変わらない。俺が怒っても、彼女は変わらない。俺が泣いても・・・顔色一つ変えやしない。そんな彼女はガラス製。

答えが返らなくても、声をかけてしまうのは何故だろう？

雪の降る世界で彼女に恋をした俺様殿下のちょっぴり切ない物語。

雪が告げる

しんしんと雪が降り積もる。

純白の絶景は見ているとぼうつと永遠に見てしまつ気がするが、自分にはそんな事をしている余裕は無いことに

気づき、彼、レフ・ヴァロフはペンを握り直して書類に向き直った。

一度集中してしまえばもう外など気にならなくなっていた。

・・・いつもなら。

この日は何故か外をついつい見てしまふ。

何故だろう・・・何かを感じる。

誰かの魔力か？いや、それならここの魔力報知器が教えるはず、、

何かが、何かが在る。それだけがひしひし伝わってきた。

「・・・面白い。何があるか確かめてやろうじや無いか。」

口元を歪め、ニヤリとわらう。

高級感溢れる革の椅子から腰を上げて

こそこそとドアに向かう。

うつかり女中のおばさん軍団に見つから無い様に、

見つかったら？・・・セクシヤランスハランスメントの嵐だ。

白いYシャツは厚化粧の彼奴らの紅で真っ赤になり、

要らぬプレゼント（大概がポケットの中でグツシャグシャに破壊され尽くしたセンベイ等）

を貰ったり、ベタベタと顔を触られたり、e t c・・・

う、、、おええ

ヤバイ。気分が悪くなった。早く外の清々しい空気を味わおう。

足を速めて神殿の裏口から出る。

すると、向こうから人が来た

「っあれー！？レフ殿下じゃないですかー！仕事は？もう終了ですか？

じゃあ、一杯お姉ちゃん達のところでやりましょーよー！」

すり寄って来たそばかす天パの見るからに頭のかるそうな男に

呆れつつ今夜な？とその誘いにはちゃっかり乗る。

「なあ天パ。お前何か見たか？ここら辺で」

尋ねると男は憤慨そうに

「俺のこと天パ言うのやめれって何回も言いましたが？」

「どうでもいいだろそんな事。早く答えろ。」

「・・・この偉工口殿下。」

「ああん？（怒）」

殺気めいたモノを感じた天パは慌てて

「ああああ！つとそういえば正門付近でなんかいたかも？では、

これにてドロン！」

脱兎の如く逃げ去った天パを刺す勢いで睨んだ後、

俺はその正門に歩を進めた

雪がギュームギュームと沈み、俺の足を飲み込む程に積もっている

はあ、と白い息をわざと吐き息が消えゆくのを見る。

「！！何がキミみたいな事してるんだ・・・今日俺は何か可笑的い。」

正門に着いた。

けれども何も無い。

やはり嘘だったのだろうな。あの天パめ、今夜は覚悟しておけ

腹踊りをさせた上にさらに水を飲ませ悪酔いし無い様に美女達に介抱させたあとベットでスヤスヤと寝させてやる

これ、、、罰なのか？と思う位軽い罰をニヤニヤしながら思案している。

何気に優しいor馬鹿なのかもしれ無い。

「さて、では帰るとするか。結局何も無いし・・・ん？」

ガウディ風の神殿。

その正門の柱の付け根に光るモノがあつた

「なんだ？・・・像？」

女の像。

レフはしばらくぼうつとその女に見入っていた

美しい・・・彼女は、誰なんだ・・・

「そなたは、何故ここにおるんだ？」

思わず問いかけてしまった

答えが返ってくると思つて居無いのに、自然と声が出た

しかし、案の定

ガラス細工の女は口を開かなかった。

雪が告げる（後書き）

ノリで書いてしまいましたが、楽しんで頂けた方がいらっしやっただけなら幸いです！

ご覧頂きありがとうございます

こ、このしわがれた変態がにじみ出ている声は！

「じじい・・・」

もう一つ雪玉を喰らった

「儂はまだ59だ。中年の域はまだ脱して居無い！！」
ふんぞり返るなよ糞じじい

「んな下らない事でこの俺に雪玉を投げたのか・・・隠居生活で頭
逝ったのか？」

あ、いや。元からか・・・っと危ねえ！」

今度は上手く避けられた
流石オレ。ニヤリ

「お前はもつと親を大事にしろ！泣くぞ！」

「土に還れ馬鹿野郎。俺は今忙しいんだ」

「何？またあれか？女か？」

「俺の用事はそれ以外に思い浮かば無いのか・・・？」

「もちろん。」

・・・もう少し真面目に生きよう・・・

が、今はそれどころじゃ無い。
彼女だ。

「ああもついい。親父はどうか行ってる。邪魔だ。女の事なんだよ。」

「なんだやつぱりそれじゃ無いか！で？で？どんな娘？儂にも一口

・・・」

瞬間、親父の両頬に拳が入る。

右はオレ。
左は・・・

「パーヴェル！ー！こんの浮気者ー！ー！ー！」
「お袋！丁度良かったこれ《親父》どっかやってくれ！」
「レフ！あんたまあ大きくなって、益々男前になったわ！」
「アリヨーナ。良い加減子離れしたらどうだ？親バカはウザがられるそうだ。」

「パーヴェルはバカ親じゃないかい！」

三人家族の会話は常にこんな感じだ。
そして、ギヤイギヤイ騒ぐパーヴェルじじいとアリヨーナ母さんに退散してもらい、俺は一息ついた。

「たくつあの人は・・・」
バリバリ髪を掻きながら彼女に向き直る。

いつまでもこうしては居られない。
誰かに見つかって取られる前に、

「よいしょつと……軽いな。綿を担いでる様だ。」
彼女を横抱きにして、自身の部屋に持っていく。
途中誰にも合わない様に、またコソコソと、

ガチャリ。パタン。
寝室の扉をしめ、ホッと一息。

彼女をベットに横たえてやり、その隣に俺も腰掛けた。
この俺が甲斐甲斐しく世話をするなんて、
「ふん、そなたこの俺がこんな風に良くしてやってるんだ感謝しろ

よ。」

・・・。

しまった。またやってしまった。

・・・まあいいか。他に人なんて居ない。

「俺の名はレフ。レフ・ヴァロフだ。この星一番の強国の王、驚いたか？」

一人ハハハと笑い、彼女の頬を撫でる。

「そなたの名は……よし、俺が決めてやろう。そうだな、何がいか。」

可愛らしい名にするのもいいが、彼女は美しい方が好きだろうか。

俺は美しい方が良い。うん。美しい名か・・・

色々と、浮かんでは消え浮かんでは消え、を繰り返すけれど時間ばかりすぎて行く

・・・むずいな。うん。後だあと！

「ま、まあその内すごい良い名を付けてやる待ってる。そうだ、そなた外に居て

少し汚れて居るんじゃないのか？」

見ると、足元等に泥が付着している。

やはりな。

俺は汚いのは好きじゃない。

女中に布を持ってこさせ、ついでに言い忘れていたが彼女は全裸だったのだ

ドレスもたのんだ。

「はあ。ドレス・・・ですか？」

「ああ、出来るだけ派手なものが良いな。早くしろよ。」
女中は首を傾げながら持つてくる。

「・・・もつと清楚なのが良かったか？俺はこれが良いが。」
好みなんて分かるはず無いのについつい聞いてしまう。

ドレスの着せ方が分からず（脱がし方ならお手の物）悪戦苦闘しながら着せてやる。

ふう、と額の汗を拭い。彼女の変わりばえを見た。

真紅のドレスに飾られた彼女は妖艶な雰囲気を出している。
その姿に胸が締め付けられるけど、眼が離せない

見つめていても俺たちの間には冷たい空気しか漂わない。
呆然と突っ立っている俺は操られたように口を開いた。

「そなたは、、そなたは何者なんだ。。。何処からきた。何故あそこにいる？」

返答の無い質問を馬鹿みたいに繰り返す。

その瞳には何も映らない。

透き通ってしまう。

その瞳で見たい欲しい。堪らなく愛おしい。
この気持ちは何だ？

何故そなたは俺をこんな風にさせる
一人でただの像に話しかけて、ドレスなんて着せて、
まるで幼児の人形遊びじゃないか。

惨めだ・・・この俺が、惨めだと？世界最強と謳われたこの俺が！？
悔しい。悔しい悔しい！！

「くそ！！そなたは何なんだ！」

叫ぶと同時に、彼女の肩に手を掛け
思い切り口付けた。

当然、彼女の唇は冷たくて
俺は更に胸が締め付けられた

雪が眩しい

妖しいライトに包まれ、

酒や、香水の匂いが染み付いた高級ホステス。

其処の雰囲気は俺は気に入っていた

まるで別の次元に来たようで、仕事の事などを簡単に忘れていられるし

柔っこい女達に囲まれるのは悪い気はしない

むしろ普通はそれが目当てだろう。

・・・けれども、もう俺はこの空気を楽しめなくなっていた。

カランツとウオッカの氷が溶ていくのを見ながら、

惚けて居た

さっきの彼女にした口付けの冷たさが

鮮明に唇に残っている。

そう、彼女は、、唯の像である。

苦い汁が身体を駆け巡るのに耐えていると

一人の女が俺の胸元に擦り寄って来た

女はピンクの唇を意味深に曲げ、目は何処か誘っている様だ。

「レフ殿下？先程から少ししかお酒をお飲みになられて居ない様ですが、

お具合でも悪いのですか？」

上目遣いで見てくる。

その眼差しはしっかりと俺を捉えていた。

そして

不意に、頭を過るは彼女の瞳。
何も映さない、冷たい、碧い、瞳。

胸の息苦しさが蘇って来て、それから逃れる様に
忘れる様に女の腰を引き寄せる。

「否、気にするな。それより良い肢体だな。。。一発ヤルぞ。」
女の耳を甘噛みしつつ、囁く。

「…………仰せのままに。」
うふふつと笑う女。

…………彼女はどんな風に笑うのだろうか。

「じゃあ早速二階の部屋にご案内致しますわ。」

…………殿下？」

早々と腰を上げる女とは反対に、俺はぼうつと座っていたが、
見兼ねた女が俺の腕を取り、導いて行った。

女の喘ぐ声も遠く、

流れるロマンチックなBGMも遠く、

淫猥な匂いも、音も、汗も、

霞んでいる。

そんな事を最中に考えたのは
初めてで酷く動揺してしまった。

「ねえ殿下あ。。。キス、して？」

行為の終了後、

女が口付けを要求して来た。

「はあ？」

女としては先程の余韻に浸っていただけで口走ってしまった事なのだろうが、俺は酷く不快になった。

「チツ、誰が貴様みたいなゲスに口付けなどするか。鬱陶しい。

帰る。」

そう吐き捨て、服を身に纏いチップを払って店を出る。

雪がちらちら降って来ていた。

「レフ殿下ー！！どしたんです！？気に入った娘いなかったんすか？」

一緒に来ていた天パが追いかけて来るが鬱陶しいので無視して馬車に乗り込む。
発車する馬車

「え？あれ？ちょっと！？俺置いてけぼり！？」
無論。

しかし、思えばあいつが色々と言ってくれたおかげで彼女に会えたのも事実だな。。。

礼ぐらいのつもりで宿でもとつといてやろう。

ガタガタと揺れる馬車に揺られながら溢れて来るのは彼女の事ばかり。

啼かせたい。

乱れる姿が見たい。

あの唇の向こう側を弄りたい。

唯、彼女に・・・触れたい。

「おい、、急げ。」

馬車の運転手をせかせる。

「は、畏まりました。」

過ぎ行く雪達のスピードが速まる。

宮殿に着き、真っ先に寝室に向かう。

鼓動が心無しか速くなった。

会いたい、

天パの誘いになんて乗らなければ良かった。

不快だ。早く、早く会って癒されたい。。。

扉の前に立つが、さっきの女の匂いが服やらなんやら染み付いているのが

何故か気になった。

何となく、この姿で彼女には会いたくない。

『おい、風呂を用意しろ。』

魔術で使用人の脳内に命令し、熱いシャワーを浴びる。

さっぱりした所で、バスローブを来て部屋にやっと入る。
ガチャリ、パタン。

「・・・・・・・・ただいま。」

彼女は俺のベットの横に立たせている。

おかえりなんて、言っではくれない。

「今宵は酷い雪だな。結構肌寒かった。」

真紅のドレスの彼女を見つめながら何気ない台詞を吐く。

ああ、くそつまらする。

先程ヤツタばかりなのに、もう滾っている自身に少々呆れた。
そくだ・・・ネグリジエも着せよう。

「そなた、俺が居ない間どうしていた？」

突っ立っていたに決まってるだろう？俺は馬鹿か。

「あゝ。そうだな、もう夜も遅い。寝るぞ。」

シャンデリアのスイッチを切るために彼女に背を向け、スイッチに向かつていく。

一步を踏み出した瞬間、

何か彼女が言った気がして、くるりと期待を孕んで振り返る。

「・・・何だ？何か言ったか？」

見つめるが、彼女は沈黙を通す。

気の、せいか。。。当たり前だ。

それでも、何だか名残惜しくて彼女に手を伸ばす

俺がちよっと前に口付けを贈った唇に触れたかった。

しかし、あの冷たい温度と感触が走馬灯みたいに過り、
思わず手を引つ込めた。

「・・・おやすみ。」

寝室の静寂は余りにも巨大で、

俺の眩きなんて丸呑みしてしまった。

彼女に触れたい。

でも、触れたら、触れてしまったら

認めたくない事実が目の前に突きつけられる。

彼女は生きて居ない。

死んでも居ない。

ガラス細工の、人を模した、モノ。

羽毛布団をかけて、薄目で彼女を伺う。

月の光に照らされ、碧いガラスから淡い光を溢れさせる彼女に、
俺は、

恋を自覚した。

雪、溶かす

朝、街は黄金の光に満たされていく。

そんな景色を俺は、宮殿の展望台から眺めるのが好きで昔から一人でここに来ていた。

この最高の景色をこんなに良い所から眺められる俺だけが。

そんな優越感も味わっていて、一生涯ここには誰も連れて来させないと考えていた幼い俺を思い出し、苦笑いを浮かべる。

「・・・美しいだろう。誰かを連れて来たのはお前が初めてだ。たく、もっと喜べよ。」

相変わらず、表情の無い顔の彼女の横で文句をたれる。

「ふん。そなた、こんな絶景は初めてだろ。そなたが何処から来たかなんて

知らんがな。この景色は国一番と言われているんだ。」
ここは色んな思い出のある場所だった。

そう、例えば、

「とにかく俺は群れるのが嫌いな子供だったから、他のガキなんかの相手なんかしたくなくて、よく此処に逃げて居たな。」

まあ、大人になってからは女に囲まれ、もう群れが嫌だとはあんまり感じなくなってるな。」
薄ら笑いをして、満更でもない顔をする。

そこで、チラリと彼女を盗み見た。

「ふふん。いいか？女なんて掃いて捨てるほど俺には居るんだ。それでもそなたを構ってやっているんだ。分かったか？」

彼女が動いている温かい生き物だったら、、、、

少しヤキモチを妬いて欲しいと思った。

でも、俺がモテようが彼女は何も返してくれない。

当たり前。・・・そうやって割り切れるモンでも無くなった。

恋をしてしまったから。

そう、このガラス細工の人形に。

高鳴る心臓は世に言う『ときめき』だろうか。

俺は、白い息を吐いて昨日の晩に考えた事を告げた。

「・・・なあ。俺、そなたを探そうと思う。」

本物の、そなたを。

像なんて造られる位だ何処ぞの姫君かもしれない。

動く、そなたに会いたいんだ。

会えたら、あわよくば婚姻も結ぼうと思う。

ほんのりと、彼女との未来が瞼の裏に見え口の端を上げた。

「そなたに会ったら、まず真っ先に名前を聞こう。」

あ、今のそなたはきちんと二人の寝室に飾るからな？安心しろ。」

そう言つて、額にキスを落としてやった。

動く彼女に会える。

そう思ったら、今の彼女に迷いなく触れる事ができた。

彼女の腰を引き寄せ、その瞳に朝日を映すようにしたが
光が反射して、大変眩しく
彼女にまた文句をたれた。

・・・動く彼女に会える。そう、会える。
もう、答えの無い会話をする事も無い。

嬉しいと思うが、何かが心に引っかかりがあった事を
俺はもつと気にするべきだったと
後に、俺は思う事になる。

思い立ったら即行動。

それが俺のモットーである。

後回しにした事は今まででは彼女の名付けぐらいだ。

だから、宮殿の仕事場に行った瞬間に俺は部下に彼女の搜索を命令
した。

脳に直接彼女の顔を送る

「おいおい、何だいこりゃあ！ド級の美人じゃねえか！

殿下ーこの娘何処で見つけて来たんだい??」

尋ねて来るクマみたいな風貌の幼馴染でもある執事の男を
適当にはぐらかして、仕事をする。

流石に正門の柱で見つけたなんて言えない。

部下に送ったのはガラス製ではなく、俺が勝手に人間の姿を想像し
たものだ。

「にしても、遂に女つたらしなレフ坊にも春がきたかああ!!」
「煩い。」

半ばムツとする。

「春、春、なんて言うがな俺だって恋の一つや二つ・・・」

「したのか？」

キョトンとされた。

「当然だろ。ええつと、、そうだなあ。。。。」

自分の過去を振り返ってみる
すると

「・・・・・・あれ？」

見当たらない・・・？

彼女に感じた恋という強烈な感覚を過去に探す。

「お、かしいな。。まさか、俺は、」

「初恋なのか？」

！！！！！！

身体中にビリビリッと稲妻が奔る。

「嘘、だろ？」

ポカーンとした口をクマがとじさせる。

「ああ、まあ。呆然ともなるよな。お前今年いくつだよ。」

「24.....」

「・・・・・・なるべく早く見つけてやる。」

有り難い。ならば・・・

「・・・・・・なら、3日以内だ。」

「な！！この我が儘野郎！無理に決まってんだろ！？」

「聞かない。出来なきゃ貴様のそのウザったい顎髭をブチ抜く。」
クマはそうやって脅すと何でもやるから使える。

ブツブツと俺を呪う声が聞こえるが、無視だ。

さて、仕事に入ろう。

- - - - -

ガチャリ、パタン。

「ただいま。良い娘にしてたか？」

バサバサと上着を脱ぎながら質問する。

「今日からそなたを探して居るんだ。見つけたら即座に俺の妃にさせるからな。」

ニツと笑いかけ、頬を軽く撫でる。

もうすぐ、彼女が手に入る。

どんな声なんだろうか。

どんな風に俺を呼んでくれるのだろうか。

どうやって笑うんだろう。

泣くんだろう。

怒るんだろう。

「早く、会いに来い。」

そつと彼女を抱き寄せる。

激しい鼓動は恋心の証。

唇を幾度となく重ね、

熱い吐息で彼女を湿らせていった。

それを見た俺は、何か違和感を感じる。

早く会いたいと願うのに、

俺の心はまだ、
何かが引っかかっていた。

雪は応えず

それから、3日目の夜。

彼女が見つかったと言う連絡が来た。

その時の俺は、驚きの余り感極まって声が出せなかった。

【おい、おい大丈夫か？】

クマのドスのきいた声でハツとする。

「あ、ああ。」

【にしても、今回は俺にしては時間が掛かったな。】

「確かに、あの脅しをしたらお前の行動スピードは普段の5倍だものな。」

・・・普段がノロ過ぎると思うがな。」

【チツチツチ。舐めんじゃねえよ？俺はな、あのノロさで女の子達の萌えを狙ってるんだよ。】

「ほう。何処が萌えなんだか理解不能だ。俺はむしろ（おえ）だな。」

【おい。吐くな吐くな。・・・レフ。俺は見つけてやった恩人だぞ？」

「わあったよ。あんがと。」

【・・・ん。まあいいや。頑張れよ。】

ガチャリ。

足が何時の間にか震えていた

鼓動が馬鹿に五月蠅いけど、どうしようも無く俺は幸せだった。

・・・逢える。
本当に逢えるのか。。。
彼女に、遂に・・・

暫く余韻に浸って受話器の前に突っ立って居ると
女中軍団に見つかった。

サアアアッ

・・・全身の血が凍る気がした。

さて、それから数時間後。

「た、ただいま。。。ううっ」
バターン！

嵐に揉まれながらも、必死によろけながら寝室に倒れこむ。
息も絶え絶えな状態だ・・・

くそっあのおばさん共め、、、
強すぎる、、、

いずれ、いずれ目にもの見してやる！！

とりあえず、香水やらなんやらで臭い服を脱ぎ捨て、
ザブンと風呂に浸かり、ホッと息をつく。

風呂の湯で顔をゴシゴシ洗いながら、俺はある事に気づく。

そう言えば、クマは何も言わなかったな・・・

何処で見つけたとか、

何処の人だとか、

・・・まあいいや。

どうせ逢うんだ。

にやける頬を叱咤しつつ、
風呂から上がりバスローブを羽織って床についた。
明日も早くに会議だ。。。寝よう。

が

目が爛々と冴えていた。

・・・しまった、寝付けない。

今日は衝撃的なことがあったし、

おばさん共でストレスは溜まったし、

何だかまだドキドキして、寝付けない。。。。

寝返りをうち、横にいる彼女を見つめた。

彼女はいつも通り、淡い光を放ちながら立たずんでいる。

「・・・なあ、聞いているか？」

ポツリと呟いてしまう。

何故そんな事を聞いたのかは分からないが、

ただ、見つめているだけでは物足りないのだ。

「俺な、今度の週末そなたに会いに行くんだ。本物のそなたに、

そなたは嬉しいか？嬉しいと言えよ。」

嬉しくて一人くつくつ笑っている

違和感がまた過った。

何だ？これ。。

彼女に逢えるのに、本物の彼女に逢えるのに、やっぱり
引つかかるな。。。

ずっと彼女を見上げる。

「・・・そなたはそなただよな。」

これから逢う彼女は、そなただよな。。

遂に、違和感を言葉にして、彼女に問う。

しかし、

答えてはくれない。

そんないつも通りの彼女を今日は一段と憎らしく思った。

「ふん。俺は何を聞いてるんだ。そなたは、もうただの像だ。」
そう、これから逢う彼女が俺の姫君だ。。

その夜、俺は妙にささくれ立った心を抱え眠りについたのだった。

そして、ほろほろと時間が過ぎて行き

気付けば彼女と逢う日になっていた。

正装をし、バサバサの金髪を綺麗に撫でつけ、
気を引き締める。

待ち合わせ時間が迫って来た

「・・・行ってくる。」

これでもう、二度とガラス製の彼女に話しかける事は無いだろうと
思いながら

俺は、ゆっくり扉を閉めて行った。

さて、彼女に、会いに行こう。

雪のみ想ふ（前書き）

何となく、古文のふにしました。

雪のみ想ふ

馬の蹄が土を勢い良く蹴る。

その激しい音は自身の心臓の鼓動とよく似ていて、可笑しくなった。

「屋敷まではあと、どれ位だ？」

馬を操る男に聞くと、

「は、後10分もかからないでしょう。」

ふん。順調か。。。

彼女との待ち合わせ場所は、ボルドー伯爵の屋敷

ボルドー伯爵は今年で70歳を迎えるそうで、その記念パーティーらしい。

そして、彼女とは遠い遠い親戚だそうなのだが、

何のキツカケか知らないが

とてもボルドー伯爵と仲が良く、今宵のパーティーに呼ばれたらしい。

まあ、俺も偶然ボルドー伯爵に呼ばれていた（行く気はなかった）ので好都合だった。

そう思いながら

ふっと窓をみると、ネオン街に舞い散る雪が目に入る。

その一粒一粒がランプの灯りでオレンジ、黄色、赤、青に変幻していて、とても美しい。

・・・彼女に会ったら、これと一緒に見よう。

口を曲げてニマニマして居ると横から声がかけられた。

「レフ殿下、顔が嫌らしいのでさつさと戻してくださいませ。」
「おいおい、レフーんな楽しみなのか？」にやにや

気のせいだろうか。。。

こいつらの声を聞いただけで、雪の輝きが炭のように見える。

「・・・オールバック。貴様の方が365日嫌らしい顔つきだぞ。」

「お言葉ですが、私の顔は凛々^{わたくし}しいと屋敷の者達に評判で御座います。」

さらりと言つてのけるこの男は、黒髪黒目のオールバックで、凛々しいと言つよりは生真面目な顔。

ただし、何か目が誘っているような気がしてなら無い。

女中の一人は眼力フェロモンと呼んでいたな。。。

そして、

「クマは、何も喋るな鬱陶しい。」

「へっへっへ。照れてヤンの。っうぐふ!!!!」

みぞおちに拳を叩き込む。

「レフ殿下。グッジョブで御座います。」

「ふん。」

中々腹の黒い軍長だ。

腹黒オールバックが口を開いた。

「ところで、そろそろボルドー邸がお見えになって来たようです。」

「おお!? 本当か! どれどれ?」むぎゅっうっう。

クマは真ん中に座って居るので窓を見るには必然的に誰かを押しつぶさなければならぬ。

「ちっ。クマ。余り動かないでくださいませ。貴方の執事とは思えない筋肉に溢れた身体で

押しつぶされます。」

「んだとお！？てめえはこの国の軍隊隊長の癖に何ひよつちい事言
ってやがる！！」

・・・確実に、二人は就く仕事を間違えたな。

宮殿に帰ったらこいつらの仕事について検討しよう。
たく、疲れる。

折角いい気分になっているんだから邪魔をするな。

「クマ、オールバック。五月蠅い。」

少し低い声色で言うと、二人は大人しくなった。

しかし、こいつ等が大人しくなると俺の心臓が五月蠅く思う。
行き場の無い苛立ちを持て余し、

俺はボルドー邸に到着したのだった。

- - - - -

扉に向かうと、執事らしき老人が迎える。

「レフ・ヴァロフ殿下。今宵はようこそおいで下さいました。

どうぞ、ごゆっくりお楽しみくださいませ。」

丁寧に腰を折る老人にそこそこの挨拶もせず、

パーティー会場に入って行った。

ドアマンが扉を開ける瞬間

人工的な光に当てられ視界がかと開いた様だと感じた。

流れる優雅な、それでいて心踊るメロディー。
一歩、また一歩と脚を進めて行くと、

見つけた。

真珠のネックレスと、淡い紫色のマーメイドドレス。
斜め分けのショートカットで、
ふふつと微笑む彼女に、目が釘つけになる。

彼女の肩に、手を置いた。

「?・・・あら。レフ殿下ではありませんか。お初にお目にかかります
ます

メイ・ キュイジリアンと申します。」

「・・・メイ。」

ポツリと知りたくて堪らなかった名を繰り返す。

「メイ。一曲踊ろう。」

そう言つて、メイの手の甲にキスを落とす。

そこで俺は温もりがあると思っていたが、

案外メイの手は冷たくて驚いた。

ピアノの音色が始まる。

最初は静かに、

そこからワルツの様にリズムあるメロディーに変わり
ステップを踏んで行く。

目の前には楽しそうにクルクル舞うメイ。。。

細い腰に触れ、揺れるメイの髪を眺める。

顔つきはガラスの方とそっくりだ。

しかし、メイの瞳は、俺が予想して居たのとは違っていた。

茶色い。華やかな色。

俺が予想したのは、深いミドリ。

・・・又、心がざわめいた。

「レフ様って、無口なのですねえ。ちよっぴり意外でしたわ。」

うふふっと甘ったるい声を漏らすメイに、俺は、

衝撃を受けた。

そう、だ。俺は、何をしている？あんなに、ガラスの彼女には話し

かけていた

では無いか、、どんなに答えてくれなくとも、

毎日毎日、ただいまを繰り返していたでは無いかっ

「・・・今日は余り体調が優れ無いんだ。」

そう、きつとそうなんだ。

「あら。それは大変！直ぐに医務室にゆきましよう？」

上目遣いで見てくるメイに押され、

思わず頷く。

医務室には俺とメイの二人きりであった。

ベットに横になり、薬品を調合しているメイを見る。

「ボルドー様は薬品の事も詳しく、私も良く教えて貰ったんですの。

さあ。これでどうかしら？お飲みになって？」

差し出された粉薬を飲もうとするが、
何故か手が止まってしまった。

「レフ様？どうかなさって？」

キョトンとするメイを見た。

無邪気そうな瞳に妖しい光が宿って居るのを俺は見逃さなかった。

「・・・メイ。具合はもう良くなった。少し、話をしないか。」

ぐっとメイを見据えると、

メイはまたキョトンとして、頷いた。

「メイ。メイは、ガラスで彫刻を掘られた事があるか？」

少し考える素振りをし、メイは口を開く

「・・・ええ。」

「それが、俺の屋敷の柱にあった。何故だか分かるか？」

「わからないわ。ねえ、そんな事聞いてどうするの？」

「黙って答える。その像のメイに会って、俺は、恋をしたんだから。」

メイが息を飲む。

「・・・ふふふつなら、私達両思いじゃ無い？」

首にメイの腕が巻きつく

不思議と、俺は冷静だった。

「・・・そうなのか。」

「ええ。私一目で気に入っちゃった。」

クスリと笑うメイ。

医務室は緊張した静寂に包まれた。

自然と二人は唇を寄せていく。後、少し。

脳に一瞬、過る影。

ガラス製の、彼女。

「っ！」

思いつ切りベリっと思がする位メイを引き剥がす。

「きゃっ!？」

「・・・帰る。」

「え？れ、レフ？」

「悪いが、もう帰らせてもらっ。ではな。」

颯爽とベットから出て行く彼を、メイは止めようとする。

「・・・寄るな。寄ればただでは済まさない。」

低い声色で、メイはビクついて、動かなくなった。

レフは、殺気だっ居る。

「な、何かした？」

「喋るな。」

「レフ！レフ様！！」

叫び声を遮る様に、

医務室の扉は閉められた。

瞬間。

薬の瓶を叩き落とし、

メイは怒りに打ち震えた。

「・・・ちえつ。後少しでレフが手に入ったのになあ。
つくづく邪魔をするんだな、あの死に損ないが。」

不気味な声と共に、

メイはその顔を歪ませていった。

雪のみ想ふ（後書き）

クマを秘書から執事にしました。

雪は愛さず

帰ると言ったら、

クマは驚愕し、オールバックは目を見開いていた。

詮索は許さず、始終無言で馬車に乗り込む。

拳を握り締め、齒を食いしばり、窓の外を睨みつけていた。

街は先程と何ら変わらずに彩られている

しかし、それは何処かくすんでいて、人を馬鹿にした輝きに見え舌打ちをした。

この苛立ちは、何なのだろうか。

今夜は楽しい日になる筈だった。それを裏切られた苛立ちか。

俺が求めていたモノが与えられなかった苛立ちか。

そして、その全ては誰でも無い自身の気持ちのせいで起こっている。
その事に対しての苛立ちか。

・・・。

悶々と考えていると、声がかけられた。

運転手か

「・・・レフ殿下。到着致しました。」

気がつけば自身の宮殿の正門が目の前にあった。

彼女との始まりの場。

その考えは、苛立ちを更に募らせた

足早に寢室へ向かう。

ドアを荒々しく開くと、彼女が佇んでいた。

何も、変わっていない。

少し、その様子に拍子抜けした。

パタンと、扉は静かに閉まって行く

「・・・ただいま。」

さっきの苛立ちも、何だか虚しくなり、しおしおと萎んで行く。
彼女は変わらない。

俺が怒ろうが、話しかけようが、笑おうが、女と遊ぼうが、

ただそこに居るだけだ。

不意に、何か言いたくなった。

「っな、なあ。そういえば、そなたに名を付けると言ったな。

丁度いいつけてやろう。」

本当の名を聞いたのに、

彼女はメイ・キュイジリアンと言うのに、

・・・その名が受け入れられ無い。

メイはさっきの女。

彼女とは

違う。

そう、俺にとっては二人は違う人間だ。

もう、メイでは埋められ無い穴がある。

動かなかるうが、話さなかるうが、その穴を埋めるのは

「そなただ。そなただけが俺を満たす。」

そして、満たされたモノが口から溢れ、零れてしまった。
俺は、

「そなたを愛してる。」

ガラス製の、そなたを。

地獄は美しい

目が覚めると、窓の向こうから微かに雨音が聞こえてきた。うとうとと、まだ覚醒しきっていない頭がみるみる内に冴えてくる。いつもの雪じゃなく、雨が降った。降ってしまった。

・・・最悪だ。

ガバツと勢いよくベツトから飛び出し、窓を開ける。

雨は思いのほか強くかった。草木を揺らし、打ちつけ、滝の様だと錯覚する程の水量で矢が飛ぶ様に鋭く速い。

「・・・参ったな。これではもうすぐハルが来てしまうでは無いか。
」

頭を荒々しく掻いていると、戸をぶち破るかの如くノック音が炸裂した。

「レフ！レフ殿下あ！！！」

苦々しい舌打ちが漏れる

この声はクマだ。（いや、ノック音で既にクマと分かっていたが）この焦り様、

来てしまったか。

「五月蠅い！聞こえている！！」

そう叫ぶとドアノブが回ったので焦る。

マズイ。クマに彼女を見られると面倒だ。

いきなり、王の寝室に見慣れぬ像がありしかもその容姿は昨夜のメイに瓜二つ。。。。

確実に質問攻めの嵐だ!!!

ぐつと握り拳を作り、目に力を込め、呪文を唱える。

扉が白い壁に変わった。

よし、これで開けられまい

「!?殿下!?何々?引き籠り!?今だけはやめてえええええ!!」
泣き声のクマを放っておき

彼女を見る。

「朝から騒がしかったな。そなたは誰の目にも触れさせはせんから安心してそこにずっと立つてろ。」

・・・あ、そうだおはよう。」

軽い挨拶を終え、もう一度彼女を一瞥する。

「雨が降っているんだ。。そなたも知っているだろう?冬の終わりは激しい雷雨になることを、

そしたらハルがやって来るんだよ。毎年毎年、飽きもせずにな・

・・」

ハル。

ハルは世に言う精霊だ。俺は何故かそいつに懐かれ、

毎年、冬の終わりにやって来る。季節の春と共に旅をするから、ハルというらしい。

そこでふと、俺は思いたった

「なあ、そなたの名。ユキはどうだ?俺は雪が何より好きだし、そなたは雪の中にいたものな。」

・・・安直だろうか?

不安に駆られ彼女を盗み見ると、不平の声は上がっていない。
正直、何も言わないから不平でも何でも言っただけなのだが。。
くそっ 苛立つな。

「もういい、そなたは今日からユキだ！そなたの様な者にこの俺が
名を与えてやったことに感謝するんだな！分かったなユキ！」

そう、足早に伝え魔術でするりと壁をすり抜けて行った。

すり抜けた先に、クマの青い顔がある。

「・・・来たのか？」

震えながら頷くクマ。

「はああ。・・・案内しろ。」

ガチガチになったクマに連れられ、客間に着いた。

客間には、大きな古ぼけた暖炉と、毛皮で作ったソファが置いてあ
るだけだ。

そこに腰掛けている小さい大きなつり目の少女に声をかけた

「好い加減にしろよハル。お前を相手にしている時間は無い。」

その言葉が聞こえた瞬間、ハルはニンマリ笑った。

「人間の女共は相手にするくせに？レフったら本当に趣味悪いん
だからっ！」

そう言い、カラカラ笑うハルにため息が出る。

「連れ出せ。」戸の見張り番の兵に言くと、ハルが仰天してしがみ
ついて来た。

「わああ！レフレフ！御免って！でもそろそろあたしの相手もして
よお！」

「俺にロリの趣味は無い。」

「あたしこれでも1234歳だもん！」

「熟女好きでも無い。」

ペイっとハルを引き剥がして、兵に渡す。

「うわあああん！レフの馬鹿馬鹿馬鹿！一年振りなのにい！じゃあどんな女がタイプなのよおお！」

ジタバタもがくハルは兵に連れられ外にでていった。
一人客間に残り、ソファに凭れてため息を着いた。

・・・どんな女がタイプだって？

強いて言うなら、ハルと正反対の無口な女だな。。
呼吸すらし無い、女だ。

嵐が去ったので、また壁をすり抜けて寝室に入る。

いつもと変わらない彼女。

ベットに腰掛けて彼女を仰ぎ見た。

「ユキ。。ユキはどんな男が好きなんだ？・・・俺という答え以外は受け付けないがな。」

しかし、その答えすらくれ無い彼女にむっとしつつ

彼女の滑らかな手を取り、口付けを落とす。

・・・まともな会話も出来ない。愛を囁こうにも彼女の耳には決して入らない。

ハルは、、いいよな。

俺を抱きしめて返って来る温もりがある。

抱けと言って嫌だと返事が返って来る。

俺を追えば追っただけ、俺は遠ざかってやれる。

それなのに、彼女は何も返してくれない。

追おうにも、彼女は逃げないし、逃げる足を持っていない。

だから、彼女は遠ざかってくれないし、決して近づいてもくれない。どうせなら遠ざかってもらった方が楽なのに・・・
最終的に、俺は彼女を諦めるためには自分で彼女を捨てなければならぬから

「・・・ユキ。俺はユキが好きだ。ユキが欲しいんだ。」
些か、口調は速くなる。

彼女の腰を引き寄せ、抱きつく。

こんなにも俺はユキに縋りついているのに、
俺は、彼女を捨てられるのか・・・？

答えは・・・否、だ。

「とんでもない恋をしてしまったな・・・。」
自嘲の嗤いをして、更に強くユキを抱き締める。

頬に、雪よりも冷たい固い感触が伝わり
それだけは返して欲しくなかったと呟いた。

地獄は美しい（後書き）

新章突入！

色んな人がでて来る予定

地獄に響く恋

ユキの冷たい固い感触は、あれからずっと俺の身体から離れず蝕んで行った。

それでも、俺は毎日挨拶をして、ユキを見つめて、笑った。そしてそうこうしている内に、春も半ばになったと知った。

「・・・で、また懲りずに来ているのかハル。」

ジロつと目の前のソファで寛いでいるハルを睨むと、同じようにハルも頬をプツと膨らませて睨みあげる。

「なによー！レフがいつまで経っても抱いてくれないからじゃない！」

「はあ、いいかハル。人間と精霊が絡むと厄介なのは知ってるだろう？」

「むうう！愛があれば関係ないわ！」

「俺は無い。」

「なっ！きいいいいい！レフのばかあ！」

プンプン怒り、ソファで飛び跳ねるハルに俺はため息が漏れる。

・・・ユキの怒った顔が見たいな。。。

そんな欲望が頭を掠める

目の前の飛び跳ねるハルがユキだったら良い。
何度だって、嫌がったって抱くの。。。

「っはあああ。」

「レフ！！そんなあからさまなため息つかないでよ！！」
そろそろハルもキレてきて、背後に炎が出てきた

ハルは炎を操る精霊で、かなり強力だ。

「お、ハル。炎が出てるぞ。さつさと仕舞え。」

「むううううう！もういい！レフのお城なんか燃えちゃえ！」
なっ！？

「おいおいハル！好い加減に、しろ！！」

さつと左手を筒状にし、人差し指と親指を摘まむように中へ入れ、
気に引き抜いた。

シウルンツと勢いよくロープが現れ、ハルを縛っていく。

「きゃあ！ちよつとレフ！！何よこれ！！」

「頼むから！大人しく諦めるハル！」

「嫌よ！何でよレフあたしの何が悪いのよ！！」
クソッ

諦めの悪いハルに俺は遂に我慢の限界がきた。

「お前がどうかなんてどうでも良い！！俺にはなあ！愛してる女
が居んだ！！！」

「ウソつき！レフにはそんな人が居るの見たこと無いもん！」

「見せない様にしてんだ！」

「はあ！？意味わかんない！！どんな女なのよ！」

「どんなだと！ハルとは正反对さ！ユキは、ユキはなあ！！」

コンコンッ

嫌に冷静なノック音に二人の言い合いは中断される。

「・・・入れ。」

カチャリと音がし、クマが入ってきたので少々狼狽えた。
??あのクマがあんなノックを・・・?

「レフ殿下。客人です。」

畏まった様子に益々疑問が募る。

「誰だ?」

「その、隣国のアルノリド王子が、
なに?アルノリド王子が?

「分かった。すぐ、行く。」

アルノリド王子。あいつとは余り面識は無いが、優秀で人当たりの
いい気さくな奴と聞いている。

しかし、なぜいきなりアポイントメントも無しにやって来た?

唸って居ると、後ろから怒鳴り声が聞こえてきた。

「ねえレフ!!そのユキって女は何処にいるの!?!」
ハルだ。

まだ執着するか。。。

「誰がお前なんか教えるか。少し頭を冷やせハル。・・・もう一
度、よく冷やせ。」

これが最後。最後の忠告だから。
頼むから、ハル。

俺から離れてくれ、離れて、もう一度あの頃のハルに戻ってくれ。

しかし、願いはあっさりと否定された

「・・・嫌だ。だって、、レフが好きだもん。。。」

「……ハル。もう終わりだ。」

「……クマ、連れ出せ。」

「あいよ。」

ひょいとハルを担ぎ上げクマはずんずんと正門へ歩いて行った。

「レフ！ーねえ、レフ！あたしは、諦めない！諦めないから！ー！」

どんどんハルの声は遠ざかって行き、最後の方は尻すぼみだったけれど、

しっかりと意思の込められた口調に心が痛んだ。

「……ハル。何処で俺たちは、間違った……？」

ハルは森で楽しく会話をして、一緒に遊び回る友達だった。

はじめての、友達だったんだ。。。

「っはああ！まあいい！さっさと忘れろハルなんて！！さて、アル
ノリド王子にでも

会って来るか！！」

肩をぐるっと回しながら、すたすたとレフは歩いて行った。

その顔が泣きそうな程歪んでいた事は、本人でさえも気がつかなかった。。。

地獄に響く恋（後書き）

ねんむい。。。

地獄はつづく

アルノリド王子は、来客用のアンティーク調の椅子に腰を下ろしていた。

少し垂れた目元はどうやら優しい印象を与えるらしく、若い女中らがちらちらと影から見ている。

まあどうでも良いが、

「アルノリド王子。何の用だ？」

ソファに腰かけると、真っ先にそれを聞いた。

アルノリドは紅茶を啜って居たが、

手を止め、カップを置き、ひたとこちらを睨み据えた。

そう、睨んだのだ。

温厚と名高いこの、王子が。

これは喧嘩を売られているな、と感じ、睨み返す。

暫くそうして居るとアルノリドの口が重々しく開いた。

「……返してほしい。」

「は？」

思わず間の抜けた声を出してしまった。

こいつは今、何と言った？

「アルノリド王子。言っている主旨が全くわからないんだが。」
こいつに何かを借りた覚えも無いし、第一そんなに親しくも無い。
耄碌しているのか？まだ若いのに、確か俺と同じ年だったような、
、

しかし、紅茶をのみつつ

そんな風な事を考える余裕は彼の次の言葉で吹き消された。

「君の所に、ガラス細工の女が居るだろう。それを、返してほしい。
あれは僕のだ。」

ごとつ、と、カップが絨毯の上に滑り落ちた。
じわじわと紅茶が絨毯に染み込んで行く様に、
俺の心に奴の言葉が染み渡って行く。

あれは僕のだ。

次の瞬間。俺は奴の胸ぐらに襲い掛かっていた。

「てめえ、、、どういっつもりだ、、、」

ねじり上げられたアルノリドは少し苦しそうにしかし、依然と、

「どういっつもりも何も、事情を述べたまで！あれは僕の所有物だ！

返してもらっ！！」

「何故此处にあると言える！？そんなモノ知らん！！！」

アルノリドは小馬鹿にしたように嗤った。

「はっ！僕も最初は半信半疑で来たが君のこの様子で確信したよ！
君は隠そうとして居るんだろう！？無駄なことを！あれは何

処に居たつて僕には居場所が分かるんだ！

運命の相手だからな！」

ますます胸ぐらを締め上げる

「意味の分からない妄言を吐くな！！何が運命だ！アルノリド！
！ガラス細工なんかに！！」

「そう思うんなら返せ！あれはガラス細工などでは無い！！」

ヒートアップする王子の戯言にレフの限界が訪れた。

勢いよくアルノリドを殴り飛ばし、吐き捨てた

「ガラス細工などでは無い！？頭がイかれたかアルノリド！！彼女は、まごうことなきガラス細工だ！！

それで無かったら、何故、あんな姿だ！冷たく硬い感触だ！

何故、

俺の言葉に反応し無いんだ！！」

一息に言い終え、肩で息をしていると、アルノリドは立ち上がり殴り返して来た。

地面に叩きつけられると同時に、激しい憎悪が湧く。

「てめえ！！！！」

「レフ・ヴァロフ！！貴様に一つ教えてやろう。あれはメイ・キュイジリアンの像では無い。

僕の運命の相手だ。貴様の言葉に反応しないのは当たり前だ。僕にしかあれの声は聞こえない！あれが愛しているのはこの僕だ！」

「だから意味が分からないと何度も言っているだろう！？」

「これだけ言って何故分からん！！あれは、

人間だ！！！」

息が止まった。

彼女は、人間。。

透き通ったガラスの彼女が、人間？

そうだったら良いとどれ程望んだことか。

しかし、いざ叩きつけられると、こうも信じ難いのだ。

「・・・では、では何故、彼女は、ユキはガラス細工になった……
……？」

ピクリとアルノリドは片眉を上げる

「ユキだと？あれに名を付けたのかい？あれは、メイ・キュイジリアンだぞ？」

「今、メイ・キュイジリアンの像では無いと言ったでは無いか。」

「ああ、像では無い。しかし、彼女はメイだ。僕の、婚約者だ。」

今は魔女の呪いにかかり、あんな姿だな。」

衝撃、そして、困惑。

一度にその感情が全身を占め、言葉い詰まった。

「な、ならばパーティーで見たメイは！何者だ！！」

「奴こそ、魔女だ。あれの美貌に目が眩み、魔法であれに成り代わった。」

若い魔女だ。」

「……！！！！」

もう、何がなんだかさっぱり分からん。

しかし、何処かで納得している自分もいた。

そう、だから、俺はあのメイには惹かれなかったんだ。

ユキとメイは違うから。

俺が愛してやまないのは、ユキの方だから。

しかし、ふと気づく。

この王子は、今のメイが魔女だと知っているのに何故、何もしない？

「アルノリド。何故、お前は魔女を野放しにしている？」

「……あれの、命は魔女が握っている。迂闊に手だしなどすれば、

あれは粉々に砕け散るだろう。」

……手も足も出ない、か。

「では、ユキの呪いの解き方について何かわかっていないか？」

「ユキでは無いと言っている。いや、まだ何も分かっていない。だから、返して貰いたいのだ

あれを観察して、呪いの手がかりを掴む。

だから、レフ殿下。メイを、僕に返してくれ。」

「断る。」

重い威圧的な視線が突き刺さるがどうでもいい。

「俺は、ユキを愛している。みすみす手放すわけが無いだろう。」

「……あれが愛しているのは僕だ。だから、ガラス細工になっても僕にだけ声が聞こえる。」

居場所が分かるんだ。」

「ほう、、で？愛しているからなんだ？ユキがは人間なんだろう？

人の心に絶対なんて無い。永遠なんて無い。常に変わるものだ。だから、ユキの心を奪えば済む話だ。」

顎に手をやりながら澄ました顔をするレフを、アルノリドは怪訝な顔つきで見る。

「レフ。君に割り込む隙は無い。僕らは愛し合って「なあ、お前はさっきからユキの事を

アレ、と呼んでいるなそんなにモノ扱いをしたいのか？」「

そう、指摘するとぐつとアルノリドは詰まった。

今ので、何となく、だがはつきり分かった事がある。

「アルノリド王子。お前はユキを愛していない。だろう？」

アルノリドの瞳が揺らぐのを

俺は見逃さなかった。

地獄はつづく(後書き)

すみません名前統一してなくて、

あれ〓ユキ〓メイですよ。f^| ^;

もう人権侵害な発言多すぎる。。。

女神のささやき

静かな笑い声が、豪奢な部屋に響いている。

その発信源は、アルノリド王子。

いや、もはや王子の原形を保っていない其れは、
みるみる内に黒い塊へと進化して行った。

何が起きている・・・？

俺は、この黒い塊から発せられる凄まじい魔力に圧倒されそうになり
必死で踏ん張る。

いつでも攻撃ができるようこちらも魔力を溜めると、
その塊が遂に人型になった。

そして、息を呑む。

「・・・メイ、いや、魔女か。」

ユキと瓜二つ。しかし圧倒的に何か違う雰囲気を出している彼女を
魔女と判断する。

魔女は静かに笑っていたのを、何が可笑しいのか更に高笑いを始め
た。

「ふ、ふふふふ、お久しぶりですわレフ殿下。。よくぞお見破
りになったこと、」

「貴様が魔女か。一体何故今頃ユキを探す？ユキを元に戻せ！！！」

「そんなお願い聞くとでもお思いですか？馬鹿馬鹿しい

おとなしく貴方はあの女を渡せばいいのよ！」

轟々と魔女の周りに竜巻の様な渦が出来る。

「させるか！」

こちら水の渦を作り上げる。

「一つ聞こう！アルノリド王子は！あいつは知っているのか！？」

「・・・いいえ？知りませんわ。あのうすのろは何も知らず、

今日も私に愛を囁きになっていて、ふふ、本当、男ってみんな馬鹿！」

風が矢のように切り裂きにかかってくる。

寸でそれを食い止め、水弾を放つ。

「レフ殿下！何故あんなガラスになった無機物の女など愛せますの！？」

何故！ずっと、ずっと私の方が美しいのに！！生身の私の方が！」

一瞬魔女の瞳が、狂おしいほどの光を放つ。

それが眩しくて、俺は隙を作ってしまった。

それを突かないわけが無い魔女は俺の腹部に拳を叩き込んで来た。

「ぐふっ！！！！げほっ・・・ご・・・ほっ」

苦悶の表情の俺を魔女は耳まで裂けるほどの笑みで見下し、部屋から消えていった。

・・・やばい。

ユキが、ユキが殺される、、

くそっ動け体・・・！

この、ままじゃ、

・・・ユ、キ・・・

意識が白黒して行く中、俺は這いつくばっている床に

一つのペンダントがあるのを見つけ
震える手でそれを掴んだ。

瞬間、何かが聞こえてくる。

優しく清らかなそれでいて澁刺とした声。

ユキが声を発するならこんな声だろうと
考え、静かに瞼が閉じて行っ

女神はただ言う

目が覚めたらそこは
広い草原であつた。

何処かに似ている。

何処に？

・・・そうだ、ハルと始めて出会つた草原だ。
奥には森もあつた。

ここで、毎日遊んだ。

「ハル！さつさと来い！置いていくぞ！」

「ちょ、ちよつとレフ！待ってよお！！！」

後ろから声がして振り返ると、そこには
あの頃の俺らが居た。。

二人で綺麗な蝶を追いかけているんだ。。

そうだ、思い出して来た。そうして、俺は

「よし！！捕まえるぞ！えい！！！」

拙い魔法で蝶を絡め取つた。

動けない蝶は、頻りに触覚を動かして何が起こっているのか確かめようとしているみたいだった。

それをみたハルは、悲しげな表情になり、
こう告げた。

「・・・ねえレフ。放して、あげよう？」

「はあ！？なにいつてんだハル！こんなに苦労したんだぞ！」

「でも、可哀想だよ！」

「蝶に可哀想も糞もない！これは俺のもんだ！」

「・・・蝶は物じゃないよ！！」

「物だ！蝶に感情なんかない！物だ！！」

「レフの馬鹿！分からずや！！」

ザッザッと去って行くハルをみて、フンと鼻を鳴らし蝶を箱に入れようとした俺は

何らかの違和感を感じた。

・・・泣いている。

蝶が泣いている。そんな気がした。

そして、気がついたら俺はその手から蝶をひらひらと放して、ごめん。と呟いていた。

・・・ハルとは、あの時どうしたわけ？何だかんだでまた一緒に遊んでいたなあ。

思えば、これがハルに教わった。始めてのことだったな。。。。
そう考えて、

ふっと目を辺りに巡らせると、幼い少女がいた。

・・・ユキ。

一目でわかった。こいつはユキだ。

「・・・ユキ。何を、している？」

彼女は応えず、ただ、俺を見ている。

答えてくれずとも、その瞳に映っているというだけで
ザワザワと心が舞い上がった。

すると、ユキがかぱりと小さな口を開け、叫んだ。

「ねえ！知ってる？あたしはもうすぐしんじやうの！」

「！???な、何を物騒なことを！ユキ！お前は死なない！死なせない！」

「無理だよ！だってもうすぐ来ちゃう悲しい哀しい魔女さんが、涙に濡れた。魔女さんが！」

魔女だと？

しかし、ユキがガラスになったのはもう少し成長してからでは無かったのか？

何故、ユキはそれを知っている？何故逃げない？

「でもね？あたしは居なくなっただ方がいいの！お父さんも、お母さんも

あたしは未来が見えるから、気味悪いって毎日ぶつから、居ない方がいいでしょう？」

何だって！？

意味が分からない。ユキには未来が見えたのか・・・？

ガラスになったのを死んだと思ったのか？

そして、、悲しい魔女？

「何で、魔女が悲しいんだ？あんなお前に化ける様な汚い女、哀れに思ふ必要はない。」

「・・・ううん。やっぱり、悲しいよ。魔女さんはね、こんなことをするのはね？」

全部・・・

その言葉を聞いた時、呆然とその場に突っ立っ
ていてユキの瞳が近づいてきたと思っ
たら、目の前が、馴染みのあるあの床
になった。

「う、うう、、、、、！！！！ユキ！！」

がばっと起き上がり、自身の寢室を急いだ。

・・・ユキ。お前の言葉を信じるよ。

女神はほほえみ

火災報知器がけたたましく鳴る。

クマとオールバックが慌てた様子で周りに支持を出していた。

「何があつた!？」

「殿下あ!やばいッスなんか殿下の寝室から謎の炎が!!」

誰にも消せないんです!このままじゃ、宮殿が焼けおつちまう

!!--!」

「落ちて着けクマ!俺が行く!お前らは家来達を早く外に!!」

「「御意!」」

.....。

おそらく、炎は魔女が放つたのだろう。

くそ、無事でいてくれユキ!!!

お前は居なくなっていていい奴なわけが無いだろう!!?

魔法で炎から身を守りつつ

ドアを蹴破る。

二つの人影が、炎の奥で揺らめいている。

「ユキ!!」

必死で向こうにいくと、

魔女と目が合った。

「レフ殿下。。。まさかここまで来るとはね、、、、こんな、こんな奴のために。」

魔女が、右手でユキの首を掴んでいる。
だらりと力なく下がった腕、閉じた瞼。

・・・かすかに上下する、胸。

「ユキを、戻したのか？」

「フン。違うわ。魔力が、もう、尽き掛けているの。」

だからこいつはあたしの手で、、殺してやるわ。」

右手に力が入り、ユキの眉がピクリと歪んだ。

「！やめろ！！！」

「どうして！！！！？」

余りに悲痛なその声は、魔女から発せられていた。

「どうして！？ねえ！！どうして！？なんでこの女だったの！？

レフ！物なのに！！感情なんかないんでしょう！？？そんなモノ！愛せるはずないんでしょう！？？」

気がつけば魔女からは大粒の涙が流れ続けて居た。

その姿は、もう、メイでも、ユキでも無い。

「・・・・・・・・ハル。」

小さな身体でいつも跳ね回っていた、あのハルが、今、一人の人間を殺そうとしている。

「ハル。なあ。聞いてくれ。」

しかし、ハルはこちらを睨めつけたまま

口を閉ざそうとしない。

「精霊だから駄目だと言ったから！！あたしは捨てた！全てを！この姿だつて魔力でなんとかしてるのよ！全部！全部！本当の魔女に捧げて！」

この世界で一番美しいと言われているこの女に化けて……！！

そしてガラスになった女をレフの所におくり、レフが本物であるあ

たしに会いに来るのを待った！！

なのに！！

なのになんでこの女なのよおおおおお！！！！！！！！！」

ぐぐぐつと最後のとどめをさそうとしたハルは、

ユキの身体から弾き飛ばされた。

「きゃあああ！」

壁に激突する寸前で俺はハルを抱きとめる。

「な、は、放せ放せえええ！」

「ハル！！！！聞け頼むから！！聞いてくれ！！！！！！」

漸く、ハルの魔力が収まってきた。しかし、まだブツブツ呟いていた。

「なんで？なんで？なんで？・・・」

ハルを抱く腕に力を込め、
俺は、ハルに告げた。

「お前に、教えられたからだあんな、我が儘だった俺に、

お前は、ハルは命つつもんを教えてくれた。

何にだって魂はあるんだって、お前が、お前だけが教えてくれたんだ。」

静かな間が出来る。

「・・・皮肉ね。あたしが教えなかったらレフはあたしを好きになったの？」

「・・・分らない。」

また、涙を流して行くハルは、笑っていた。

「レフ。。でも、レフは何時だったか蝶を捕まえて、

放そうとしなかったじゃない？」

「放した。・・・泣いてる気がしたから。お前に言われてから気づいた。」

ハルの瞳が優しい光を帯びる。

「あのね、レフ。」

もしもあの時あたしが何も言わずにいて、レフがあたしを好きになるのだとしても、

「うん。」

「あたしは、放してって言ったよ。。。」

ポツリと、ハルの閉じかけた瞳から雫が落ちると同時に、俺はハルをぎゅっと抱き締めた。

「ハル。お前は、そう言う奴だよ。そういう優しい奴だ。。。」「最後に、やっと、抱いてくれた。・・・レフ。幸せになってね？」

「・・・ハル。お前に言いたい事があるんだ。」「な、に？」

炎が徐々に小さくなって行く。

それは、魔力の限界が訪れているのを、俺に知らせた。ハルの目を見る。

今気づいた。ハルの目は、綺麗な銀色だ。雪のように、、、綺麗だ。

「ハル。ずっと、ずっと、ありがとう。」「

ハルが、笑顔になった。

「・・・ありがとう。。。レフ。」「

風鈴の鳴る音。

それが魔力の尽きる音だと気がついたのは、
ハルがガラスよりも冷たくなってからだった。

最終話 ユキと春

また、肌寒い季節がきた。

でも俺の心は浮き足立っている。

なんてったって、ユキが今日は鍋だと言ったから、
早めに職務を終わらせ、
リビングへ向かう。

扉を開くと、エプロン姿のユキがいた。

「・・・もうすぐ帰って来ると思った。」

にっと、悪戯っぽく微笑うユキ。

「また、未来を見たのか？」

「ううん。あたしにはレフ君センサーが付いてるから。

近くにいたらすぐ分かるの。」

そう言っただたくすくす微笑う。

あの事件から、もう5年。

あの後、俺はハルのお墓を建てた。

そして、ユキと結婚するために、アルノリド王子との婚約を破棄させようとした。

難題だと思っていたが、以外とあっさりアルノリド王子は承諾していた。

何故だっけ？

アルノリド王子は、ハルを愛していたからだ。

俺がユキを連れて行った時、王子は不思議そうによく似ているけど、メイじゃないな、どなただい？

と、言った。

そして、今までの事を話すと王子は初めては半狂乱した、しかし、その後静かに涙し、ハルの墓参りをしていた。

もちろん、俺はアルノリド王子に殴り付けられた。すげー痛かった。

あいつの、ハルへの思いや、痛みが全部受け止めきれないぐらいきいた。

それからはお互い連絡も何もない。
アルノリド王子が何をしているのか全く分からないが、とりあえず俺はユキと結婚した。

ユキは本名を捨て、ユキになった。

彼女曰く、

「メイよりも、ユキの方が愛されたから。」
らしい。

彼女の両親は、相当ユキを疎んでいたようだ。
ハルが入れ替わっていようがどうでもいいらしい。

・・・よくハルも耐えたな。

そんなこんなで、俺らは何度めかの冬を迎えた。

「・・・あ、白滝いい感じ。」

「ああ！取るなよ狙ってたのに！」

「いいじゃない？あたしが作ったのよ？」

意外とユキは強い。

この俺がぐうっと押し黙ってしまうほど。

「本当に美味いな。ユキちゃん！料理上手だね！流石わしの娘！」
「あんだ！ユキちゃんに近づき過ぎ！こんの浮気もん！」

「……なあ、なんでお袋と親父が？」

「あれ？レフがよんだんじゃないの？」

「呼ぶか！ー！帰れ二人とも！」

「いやじゃああ！また肉食ってない！」

「レフ！折角可愛い我が子と可愛い義理娘に会いにきたのに！
帰れないでしょ！」

ええい、めんどくさい……

「ま、いいじゃない？鍋は皆で食べましょう。」
そうユキがいう。

すると、リビングのドアが勢いよく開いた。

「今いい事言いました！お妃様！俺らも混ぜてええ！」
「今宵は何鍋でしょうかお妃様。」

「クマ！オールバック！なにちゃっかり茶碗と箸持つてんだ！」
「いいじゃない。鍋は多い方が「はいはい分かったよ！」」

「たく、ケチじゃなうちの息子は、」

「いいえ！根はいい子よ！あんだに似ず！」

「大奥様、それは俺も同感だ！レフ殿下はいい人だ！」

「クマ。褒めても肉は多めに食わせんからな。」

「げっ バレた？」

「全くクマ。貴方は馬鹿ですか。こういうのは黙ってバレように多

く箸に肉を挟んで。。。」

俺は無言でオールバックの肉を掴んだ箸を叩き落とす。
すると、俺の横のユキが弾かれたように笑だした

「あはははは！！ほんつとうにおつかしい！レフ君あんたの周りって本当にいい人たちばっか！」

その一言で、周りの空気が、俺たちの心が、あったかくなった。

「・・・あー、んーと、ま、あ。そうだ、ない奴らだ。うん」

頭をガシガシかきながら俺は次の言葉を紡いだ。

「ユキも、な！」

照れ隠しに彼女を抱き締め、顔を肩に埋めた。
皆がヒューヒュー五月蠅いが気にしない。

ユキがそつと、耳に何かを囁いた

「あたしね、今未来見ちゃった。」

「・・・どんな？」

「何時かの春に、緑と桃色が咲く庭に、

レフとあたしと、もう一人いるの。はしゃいで、飛び跳ねてる。

可愛い可愛い女の子。もう少し成長すれば、

まさかの超年の差結婚で、アルノリド様と結婚するの。」

「俺たちの、、娘？」

ふふっと笑ったユキの吐息が心地良い。

「うん。名前は、ハル・ヴァロフ。」

「……………俺は、ほほえみながら、彼女のお腹を撫でた。」

「ユキ、愛してる。」

「あたしも、レフが拾ってくれた時からずっと、聞いていた。そして、

聞こえなかったかもしれないけど、ずっと言っていたよ。
愛してるって。。。」

そう、ここにも、見えないけれど生命がある。
聞こえないけど、声がある。

……………そうだよな？ハル。

熱い目頭をそのままに、
ユキのお腹に囁いてみる。

……………とくり、と

鼓動が俺たちに応えてくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1041t/>

ガラス製の彼女

2011年8月2日22時16分発行